

利害伴なう問題
冷静な現実論で

そういうところも後には必ず
すまじいことを増すばかり。わけて
も日ソラジオに廻る三人男など
は、その先驅をゆき、特集、週末
放談（二・二九）では、来年
は、いまの経済体制をひっくりか
えたい、たのファッショの權同も
出てくるだろう」（西郷哲郎）と
か「拙吉資本主義とわれわれも仕
方ない」（藤原弘達）とか「これ
では共産党へ一票入れなともな
だろう」（秋元秀雄）といった
とがボンボンとひ出た。
これにおとずはけしいのは二
ッボン放送の「サンデー・ニュー
スショー」（二・三）で、こ

が、いまだに共産党をアカ呼ばわ
りして、いたことの感覚では、とて
もとても抵抗できるとはおもえな
い。

これについて新井達夫氏が「共
産党の恐布を国民に宣伝したとこ
ろの効果はあるはずがない。そ
れも、自民党自身の姿勢や政策を
変える方がはるかに効果があるだ
ろ」と（NHKラジオ・一〇）。

そういった人々によかれあしけれ
内容が平明で説得力がある。同氏

は、おびたらしいものだが、その中
でちよっと注目されるのは、石
原慎太郎、上田哲、不破哲三、松
本善明といった人々が、あたかも
それだけの党を代表するチャンピ
オンのような印象を与えているこ
とだ。視聴者の多くもそういっ
たところを、しているらしくおもわ
れる。

この両氏に比べると、共産党の不
破氏は、代々木のアリスといわ
れたこともあるだけに、TVフェ
ースもわるくないし、何より話の

ところで、これらのすべての人が一様に指摘してゐたことは「自民党の危機」である。それはつまり次の参院選挙に、共産党がまたまた躍進して、自民党が過半数を割るかもしれないということだ。

この見方がある程度の確率があるかも知れない。そこで自民党の対応策ということが問題となる。

「それ見たことと」

共産党
躍進で

自民党の危機

が、いまだに共産党をアカ呼ばわりしてゐたころの感覚では、とてもとても対抗できるとはおもえない。

これについて新井達夫氏が「共産党の恐怖を国民に宣伝したところ」で効果などあるはずがない。それより自民党自身の姿勢や政策を変える方がはるかに効果があるだろう（NHKラジオ・一〇）。

そういう人々ばかりあしければ、

か」

危機 指摘

り、カラ振りの解がある。上田氏は能弁ではあるが、理屈っぽい話の内容が、大衆には親しみにくく、そういったところは社会党のイメージそのものだ。

この両氏に比べると共産党の不破氏は、代々木のプリンスといわれたこともあるだけに、TVフェースもわるくないし、何より話の内容が平明で説得力がある。同氏

影響をもちつたといふことになるは党自身としても大いに喜ばねばならぬ問題だろう。

共産党はすでに「党主連想」で出演者の人選をやっているようであるが、他の党もよほど考えないとイメーシ・タウンになりかねない。

ここに意地のわるいディレクターは、以前にはよく自民党のウルトラ・コンサーバティブ諸先生を登壇させていた、最近では放言大臣や「三ツツ女官」を司つては出す。

要警戒といふところだろう。(G.O.)

る。「そうした外部からの批判がもしも、的を射たものであるならば、早速に受け入れておのれを正すのによぶさかでないだけの雅量が必要であることは申すまでもない。」「それよりも前に、すべての自由の根源である言論の自由を旗印としてかかげ、言論界の指導者として任ずる新聞人としては、まづ批判の対象とならないように、おのれをみがき、おのれを正しておことのはうが、もっと大切である」と信じる。」

まことにその通りで、常識的に考えれば、新聞社のなかには此ついた情緒と主観が誕生してゐる。それはかりか、事実を曲けたり、大切な情報をもとに落してゐる場合もある。それが読者の判断を誤らせる要因になつてゐる。白石会長のあいさつは、今さらという感しもあるが、真剣味があらう、さし迫つて解決しなければならぬ問題もある。協会加盟の各社は、まず、記者の素養と教養を高める具体的な方法を速かに講ずることに、このアピールを全般にわたつて体系化するべきである。それが新聞の信用を回復する。一つのキッカケになるであらう。

(〇〇)

勢力再編を動態的にとらえる

全体を總括的にとらえたメネルト自身の論文「二極かの展望」の計八論文から成つてゐる。

やはり興味深いのはメネルト教授自身の見方であり、彼は一九七〇年から七一年にかけて米・中・ソの三国を改めて訪問し、それぞれの国が直面する問題を直視しながら、この巨大な「三角関係」のからみあひをリアルに見きわめ、「今日のアメリカは二人の互ひにさびしく争つてゐるパートナーを相手にする戦略的に有利な地位にある」という結論を導き出している。

急に脱線した。何人もの読者に読んで貰ふた。

第二は内容がしっかりしている上だ。さすがに第一級の國際政治学者として著稱されたものが、この平易な文章の中にあふれてゐる。防衛はもとも國

政府の愛の指図者からあらまじ印象の形に聞かされていなかつたため、本書が優秀な人気を呼んでいるのはあるまいか。

(評論家・久住忠男)

◆言論人選書会・選書委員並びに評議員◆

【選書委員】大平善梧(委員長) 会田雄次 衛藤達吉 加藤亨 高坂正晃 村松暎 林健太郎

【評議員】会田雄次 阿川弘之 有竹修二 石川忠雄 衛藤達吉 大平善梧 加瀬俊一 神谷不二 加藤寛 木内豊樹 氣賀健二 久保田きぬ子 高坂正晃 坂本二郎 鈴木重信 竹山通雄 角田順 長谷川進一 林健太郎 福田恒存 藤原謙二 武蔵野郎 村松暎 村松剛 吉村正三(事務局長) 大河内敏夫(常任幹事) 奥原貞三

国際水準
の防衛論

第二は内容がしっかりしているところだ。さすがに第三級の國を除政治學者として著稱したものが、この平易な文章の中にあふれていて、防衛はもと國政府や与黨の指導者からあつた印象的な形で聞かされていなく、本書が爆発的な人氣を呼んでいるのであるまいか。

(評論家・久住忠男)

◆言論人懇話会・選拔委員並びに評議員◆

【選拔委員】	大平善祐 (委員長)	会田雄次	衛藤清吉	加藤寛
高坂正寛	村松暎	林健太郎		
【評議員】	会田雄次	阿川弘之	有竹修二	石川忠雄
衛藤清吉	大平善祐	加瀬俊一	神谷不二	加藤寛
氣賀健三	久保田きぬ子	高坂正寛	坂本二郎	鈴木重信
山道修	角田順	長谷川進一	林健太郎	福田恒存
三好修	武蔵光明	村松暎	村松剛	吉村正
【事務局長】	大河内敏夫 (常任幹事)	奥原貞三		